

令和5年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

一人ひとりが豊かな創造性を備え、持続可能な社会の創り手となるために

- 1 自ら考え行動し、課題を解決する力を備え、多様な人と協働できる生徒を育てる。
- 2 地域コミュニティを支える良識ある市民を育てる。

2 中期的目標

1 教育の方針

興味・関心に応じた深い学び、多様な学びを展開し、思考力、判断力、表現力を身につけ、コミュニケーション能力を高める教育を推進する。

2 確かな学力の定着と学びの深化

(1) カリキュラム・マネジメントを進める委員会を中心に、新学習指導要領などで求められる力を育てる。

ア 各教科等の内容を相互の関係でとらえ、3年間で生徒たちが必要な資質・能力を身につけることができるように総合学科としてのカリキュラムを実施する。

イ 新課程に対応した授業、評価の研究、実践を重ね、学習の基盤となる言語能力や情報活用能力、問題発見・解決能力を育成する。

(2) 授業改善に取り組む。主体的・対話的で深い学びを通し、思考力・判断力・表現力を高める。

ア わかりやすい授業を行う。

イ 生徒が考える授業を行う。(思考力、判断力)

ウ 授業における、生徒同士の活動、教員との対話を大切に。(表現力)

エ 基礎的、基本的な知識及び技能を確実に身につけさせる。

オ 話し合い、調べ学習、発表、実験、実習、地域貢献等を通して、考える力・まとめる力・発表する力等を育成する。

そのために

カ 公開授業、研究授業、授業見学、研修、授業アンケートなどを活用した授業改善に組織的に取り組む。

キ 一斉学習、個別学習や協働学習をバランスよく組み合わせ、学びの深化をはかる。

ク 1人1台端末をはじめとするICTを効果的に取り入れた授業の研究を進める。

ケ 生徒自身が自ら学び、授業以外でも学習できるように取り組む。

※授業アンケートにおける「興味関心が持てた」「知識技能が身についた」の第一評価をR7年度に50%以上(R4:47,50/R3:46,48/R2:46,47)にする。

※学校教育自己診断(生徒向け)の「教え方に工夫をしている先生が多い」の第一評価をR7年度に40%以上(R4:30/R3:29/R2:33)にする。

※学校教育自己診断(生徒向け)の「学校は1人1台端末を有効に活用している」の第一評価をR7年度に50%以上にする。

備考 評価の基準

第一評価	よくあてはまる
第二評価	ややあてはまる
第三評価	あまりあてはまらない
第四評価	全くあてはまらない

3 生徒の意欲を高める仕組みづくり

(1) 効力感、達成感の育成

ア 教科や教科横断的な行事などの中で自己表現をしたり、認められたりする場を広げる。

イ 教科学習と学校行事、部活動等の活動との両立を支援するとともにR7年度に部活動参加率70%以上を維持する。(R4:75 / R3:74 / 2:74)。

ウ 小学校、中学校、大学との連携を深める。また地域ボランティアなどの貢献活動を継続する。

エ 生徒が多様性を認め、お互いを尊重するため、人権尊重の意識や道徳的な態度を育む取組みを充実させる。

(2) キャリア教育の推進

ア 進路部・教務部・学年を中心に教科とも連携を図り、3年間を通じたキャリア教育を充実させる。

イ 日々の学習、フィールドでの発表や研修などを通して、自分の進路や生き方を考えさせる。

(3) 進路実現の支援: 4年制大学進学希望者の4年制大学への進学率をR7年度に90%以上にする。(R4:95 / R3:97 / R2:84)

就職希望者の就職率をR7年度も100%を維持する。(R4:100 / R2:100 / R3:100)

(4) 資格取得の推進

※学校教育自己診断(生徒向け)で「授業で発表する機会がある」の第一評価を、R7年度までに45%にする。(R4:40 / R3:40 / R2:43)

「ガイダンスは分かりやすい」の否定的評価(第三、四評価の合計)を、R7年度に10%以下とする。(R4:14 / R3:10 / R2:9)

「進路や生き方を考える機会がある」の第一評価が、R6年度に50%以上を維持している。(R4:59 / R3:62 / R2:71)

4 生徒の発達の支援と安全で安心な魅力ある学校づくり

(1) 生徒の規範意識を醸成する

ア 基本的生活習慣の確立と規範意識の醸成に努める。

イ 生徒が自分で判断して自らの行動を律することができるようにする。

(2) 生徒が安心して学校生活を送ることができるように、個々の生徒への支援体制を強化する。

ア 課題のある生徒についてSC、SSWと緊密に連携し、生徒情報交換会、ケース会議等を実施し、教員、養護教諭等が協力しながら指導方針を明示していく。

(3) 保護者・地域・教育関係機関との連携をあらゆる場面で充実させる。

(4) 働き方改革

※学校教育自己診断(保護者・生徒向け)での「何かあれば相談できる先生がいる」の否定的評価(第三、四評価の合計)をR7年度までに、生徒向け15%以下(R4:31 / R3:29 / R2:29)、保護者向け15%以下(R4:20 / R3:22 / R2:19)にする。

5 グローバル人材の育成

(1) 日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒の指導

ア 出身中学、母語指導者等との密接な情報交換を日常的に行い、渡日・外国人生徒の指導を行う。

イ 日本人生徒との交流の促進

府立門真なみはや高等学校

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標 [R4年度値]	自己評価
2 確かな学力の定着と学びの深化	(1) 新カリキュラム等の実施	ア カリキュラム・マネジメントをすすめ観点別評価の確立に向け実践を重ねる。	ア・カリキュラム・マネジメントに関する委員会 15 回 [11回] ・職員研修 1 回以上 [1 回] ・職員会議冒頭ミニ研修 5 回以上 [3 回]	ア カリキュラム・マネジメントに関する委員会に代わって、「明日のなみはやを考える会」を新設、11 回の会議を開催した。しかし、観点別評価について、職員研修などの効果的な機会を持つことはできなかった。(△)
	(2) 各教科を中心とした授業改善	ア・わかりやすい授業を行う。 ・生徒が考える授業を行う。 ・生徒同士、教員とのコミュニケーションを大切にする授業を行う。 ・基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させる。 ・生徒自身の発表の機会を設ける等授業形態の工夫をする	ア・授業アンケートの「興味関心が持てた」の第一評価を 48% [47%] とする。 ・「知識技能が身についた」の第一評価を 50% [50%] を維持する ・生徒自己診断「授業で発表する機会がある」の第一評価と第二評価の合計 90% [93%] を維持する	ア・授業アンケートの「興味関心が持てた」の第一評価は 46%、昨年度より 1 ポイント下がった。(△) ・「知識技能が身についた」の第一評価も 49%と、昨年度より 1 ポイント下がった。(△) ・第一評価と第二評価を合計すると 92%と、90%以上を維持することが出来た。(○)
	(3) 主体的、対話的で深い学びをめざす	ア・ICT などの活用 ・1 人 1 台端末を有効に活用し、プレゼンテーションソフトや学習支援クラウドサービスを有効に活用した授業を行う イ 教員相互の授業見学と研修 ・教員相互に授業見学を行い、授業力を高める。また研修の機会を有効に活用する ウ 自主的な学習の推進 ・授業以外の学習時間を前年比 10%以上の増加を図る。そのために、自主的に取り組める課題を計画的に提示するなどして学習意欲を喚起する ・読書習慣を身につける。そのために、国語科などを中心として本を読むことにつながる課題等を設定する。	ア・生徒自己診断「教え方を工夫している先生が多い」の第一評価 30%以上 [30%] を維持する。 ・生徒自己診断の「学校は 1 人 1 台端末を有効に活用している」の第一評価と第二評価の合計が 65%以上を維持する [85%] イ 教員自己診断「各教科において、生徒の実態に応じて指導方法の工夫・改善が行われている」の第一評価と第二評価の計 90% 以上 ウ・授業以外の学習時間を 1 年生 60 分以上 [平日 53 分] 2 年生 30 分以上 [平日 29 分] にする ・1 年生対象に 3 学期にアンケートを行い、1 年間で一冊以上の本を読んだ生徒が 80%以上となるようにする [81%]	ア・第一評価は 32%になり、昨年度を上回り、生徒は教員が工夫をしていると感じている。(○) ・1 人 1 台端末については第一評価と第二評価の合計は 88%となり、昨年度を上回った。(○) イ 第一評価と第二評価の合計は 95%であった。さらに、第一評価は昨年度より 11 ポイント上昇しており、授業改善が進んでいる。(◎) ウ・授業以外の学習時間は 1 年生が 60.5 分 [平日 51 分] 2 年生が 34.5 分であった。(○) ・1 年間で一冊以上の本を読んだ生徒は 80%であった。(○)
3 生徒の意欲を高める仕組みづくり	(1) 効力感、達成感の育成	ア 部活動参加率を上げる。部活動の説明会などを充実させ、全学年の生徒の部活動の参加率を高める。 イ 地域連携 地域の小中学校への出前授業や、他の機関との連携、オンラインを含めた交流を通して地域に根差した学校とする。	ア 部活動参加率 70%以上を維持する [75%] イ・コロナ感染状況を見極めつつ、3 つ以上の交流を実施する。 ・交流後に実施する事後アンケートで、満足度 70%以上となるような取り組みを行う	ア 部活動参加率は 74%であった。引き続き、生徒の自主的な活動を推進していきたい。(○) イ 多文化交流部が門真市のフェスティバルに参加。情報フィールドで地元企業のポスターを作成し校外で展示。美術フィールドが門真市アートフェスに参加。また、外国にルーツのある地元の小中学生を招いてのイベント等を実施するなどした。実施後の振り返りで、生徒の満足度、自己肯定感 は 70%を大きく上回ったと実感できる。(○)
	(2) キャリア教育の推進	ア 「産業社会と人間」から始まる 3 年間のキャリアプランの作成 ・2,3 年生のキャリア教育の充実 イ 生徒が選択を通じて自己実現を図るガイダンス機能を充実する。	ア 自己診断「進路や生き方を考える機会がある」の第一評価 50%以上を維持する [58%] イ 自己診断「ガイダンスはわかりやすい」の否定的評価 (第三、四評価の合計) 10% 以下にする [14%]	ア 「進路や生き方を考える機会がある」の第一評価は 60%で、昨年を 2 ポイント上回った。(○) イ 「ガイダンスはわかりやすい」の否定的評価は 12%で 2 ポイント改善したが、10%には届かなかった。一方で、第一評価は 4 ポイント改善した。(○)
	(3) 進路実現の支援	ア 多様な学びの中で形成した個々の力を最大限に発揮できるよう、生徒が最後まで努力することを支援し、希望進路の実現を図る。	ア 3 学年当初の四年制大学進学希望者の四年制大学への進学率 80%以上を維持する [84%] 就職内定率 100%を維持する [100%]	ア 四年制大希望者の進学率は 95%と目標を大きく上回った。(3 月 15 日時点) (◎) 進路変更した生徒を除いた生徒の就職希望内定率は 100%。(○)
	(4) 資格取得の推進	ア 資格取得の意義を理解できるように生徒に積極的な働きかけを行う。	ア 受験者数の増加 ・漢字検定受験者数 60 名以上を維持 [106 名]	ア ・漢字検定の受験者数は 45 名と減少するが、英検受験者は 106 名から 135 名と大きく増加した。(○)

府立門真なみはや高等学校

			<ul style="list-style-type: none"> ・英語検定準2級以上 (CEFR A2以上) の生徒数 100 名以上を維持する [186 名] ・選択したフィールドに関する資格試験の受験率 (パソコン検定など 80%以上維持) [100%] 	<ul style="list-style-type: none"> ・英語検定準2級以上 (CEFR A2以上) 相当の生徒数は、約 180 名。 (○) ・フィールドに関する資格試験の受験率は 100%(○)
4 生徒の発達の支援と安全で安心な魅力ある学校づくり	(1) 生徒の規範意識の醸成	<ul style="list-style-type: none"> ア 規範意識を持たせる。生徒の思いを理解しつつ指導を進め、生徒が指導の目的を理解し納得感を得られるようにする。 イ 情報リテラシーの育成。特に SNS の利用について、研修や授業を通してリテラシーを高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ア 自己診断「制服・遅刻・頭髪指導は適切である。」第一評価を 30%以上 [25%] または肯定的評価 70%以上 [67%] にする ・自己診断「先生の指導は納得できる」第一評価を 40%以上 [26%] または肯定的評価 70%以上 [70%] にする イ 自己診断「情報機器や SNS を使用する際にルールを守っている」の第一評価 50%以上 [71%] を維持する 	<ul style="list-style-type: none"> ア 「制服・遅刻・頭髪指導は適切である」の第一評価は 27%、肯定的評価は 67%であった。引き続き、丁寧な指導に努めていく。 (△) ・「先生の指導は納得できる」の第一評価は 27%、肯定的評価は 76%であった。 (○) イ 生徒自己診断の第一評価は 71%。情報機器や SNS の利用についてリテラシーを意識することが浸透している。 (○)
	(2) 課題のある (困り感のある) 生徒の支援	<ul style="list-style-type: none"> ア 軽微なことでも生徒についての情報を共有する情報交換会の開催。 イ SC、SSW などの外部人材を活用した校内組織をつくる。 ウ 生徒相談室を充実させるなど相談体制の充実を図る ・「保健だより」等を活用した窓口の周知、教職員からの声掛けを継続する。 	<ul style="list-style-type: none"> ア 支援・教育相談委員会を含めた生徒情報交換会を 7 回以上開催 [9 回] イ SC、SSW を構成メンバーとした会議を 2 回以上開催する [新規] ウ 自己診断 (保護者・生徒向け) 「何かあれば相談できる先生がいる」の否定的評価 (第三、四評価の合計) を、生徒向け 25%以下にする [30%] 保護者向け 20%以下を維持する [19%] 	<ul style="list-style-type: none"> ア 生徒情報交換会 (学年主任会) を 17 回開催、生徒の情報交換を行った。 (◎) イ SSW を構成メンバーとして、個別支援に係る会議を 1 回開催した。SSW を講師に校内研修を実施した。 (○) ウ 「何かあれば相談できる先生がいる」の否定的評価は生徒が 29%。保護者は 24%であった。次年度、相談体制を整え、SC や SSW とも連携しながら、生徒が相談しやすい状況をつくっていく。 (△)
	(3) 保護者連携・地域連携の一層の推進	<ul style="list-style-type: none"> ア 保護者、地域、中学校等へ本校の取り組みを積極的に発信する イ 保護者連携の推進のため、メールの一斉配信など確実な連絡を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ア HP のアクセス数を 1 年間で 50000 以上とする。 [新規] イ 保護者向け自己診断「学校は、家庭への連絡や意思疎通を十分行っている」の第一評価を 24%にする [20%] 	<ul style="list-style-type: none"> ア フィールドブログを新設したが、HP のアクセス数は約 30000 程度となり、目標を達成できなかった。 (△) イ 第一評価は 19%と微減。第二評価も合わせると 73%で昨年より 4 ポイント上がっており、おおむね意思疎通ができていてもいえるが、第一評価をさらに高めたい。 (△)
	(4) 働き方改革	<ul style="list-style-type: none"> ア 会議資料、小テスト等教材でのペーパーレス化を進める。 イ 各種アンケートにおいて、フォーム作成ツールを活用する。 ・メール配信サービスを活用し効率的に欠席連絡を把握する。 	<ul style="list-style-type: none"> ア 会議資料の電子化を進め、ペーパーレス会議を 5 回以上おこなう [3 回] イ フォーム作成ツールを活用したアンケートを 5 回以上実施する 	<ul style="list-style-type: none"> ア 6 月以降の職員会議・運営委員会は原則電子化した。(12 月時点でそれぞれ 12 回) (◎) イ 各学年度で 17 回程度フォーム作成ツールを活用したアンケート実施している。 (◎)
5 グローバル人材の育成	(1) 日本語指導が必要な帰国生徒外国人生徒の指導	<ul style="list-style-type: none"> ア 合格発表後、早期からの高校生活支援を継続するとともに一般選抜合格生徒も含めた生徒間交流を促進する 	<ul style="list-style-type: none"> ア 外国にルーツのある生徒達等による文化発表会等での自国文化の紹介を年 2 回実施する 	<ul style="list-style-type: none"> ア 学年集会において、外国ルーツの生徒が自国文化の紹介を行った。そのほか、門真市や他市で行われた国際交流イベントに多文化交流部が出演するなどした。[11 回] (◎)
	(2) 国際交流の推進	<ul style="list-style-type: none"> ア 生徒の短期語学研修の充実 イ 外国の学校との相互交流の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ア 参加者 5 名程度を当面の目標として、短期語学研修を再開する。 [0 人 コロナ禍のため] ひきつづき、海外に渡航できない生徒も参加が可能である国内での語学研修を実施する [1 回] イ 1 校以上の交流を受け入れる [0 校 コロナ禍のため] コロナ等で受け入れができない場合はオンラインによる交流を複数回実施する [2 回。韓国、中国] 	<ul style="list-style-type: none"> ア オーストラリアへの短期語学研修を実施した (参加者 10 名)。国内では、英語フィールドの生徒が「留学生と巡る京都」というプログラムに参加し、語学研修を行った。[1 回] (◎) イ 海外からの訪問はなし。オンラインによる交流については、中国の瀋陽外国語学校、韓国の論山大建高校とそれぞれ 1 回ずつ交流を実施した。 [2 回] (○)